



近現代神戸の観光空間 : 1920-1950年代の湊川新開地の変遷に着目して

村上, しほり

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(2):39-48

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81006268>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006268>



近現代神戸の観光空間 1920-1950年代の湊川新開地の変遷に着目して

Urban Tourism Space of Kobe in the Modern Era The Transition of the Minatogawa-Shinkaichi in the 1920-1950s

村上 しほり*
Shihori MURAKAM*

要約：昭和初期から占領期の都市空間の変容を考えると、第二次世界大戦と占領による影響は看過できない。また、観光空間のあり方を考えると、メディアの描きだすイメージが果たす役割は大きい。そこで本稿では、神戸の観光空間の変遷について、都市観光としての湊川新開地の位置づけと、その昭和初期から戦時体制・空襲被害・GHQ占領といった契機の影響に着目して、観光案内書や新聞にみられた記述を整理、検討した。明治末期の湊川付替えによって形成された湊川公園と湊川新開地本通りは、昭和初期の博覧会や市民祭りの舞台となり、神戸市の盛り場・歓楽街としての地位が築かれていった。大正末期には湊川公園南側に望遠施設である神戸タワーが建設され、ますます市内の象徴的な場所となった。1930年代の神戸では観光への取組みが盛んであったが、戦時体制によって収束した。1945年初頭の神戸大空襲によって市街地の6割以上が焼失し、湊川新開地も焼け野原と化した。戦後の生活再建や娯楽復興は行政も市民も望むところであった一方で、復興街路計画や進駐軍による接収地と民意との関係には、ときに相克が生じた。湊川新開地という場所で顕著にあらわれたその具体相からは、戦災都市の観光空間としての復興が、物質的要因や社会的認識などに何重にも規定されながら形づくられていったことが読みとれた。

キーワード：都市観光、観光案内書、占領期、戦災復興、博覧会

はじめに

近代産業社会における鉄道という交通手段や科学技術の発展による観光の大衆化は、第二次世界大戦後の米国や欧州にはじまり、日本においては高度経済成長にあと押しされるように1960年代以降に伸長した。また、こうした技術の発達に媒介されて、旅行者たちの風景の知覚もまた構造的な変容を遂げ、パノラマ的に世界を眺める「観光のまなざし」が生じた¹⁾。そもそも「観光」とは、日常から離れた景色、風景、町並みなどに対してまなざしを投げかける一方向的な行為を意味し、観光に求められることは非日常的な空間における「まなざし」の経験とみなされてきた²⁾。

観光の形態の変化は1970年代後半にはじまった。一方向的かつ客体的に消費・収奪する観光から、地域の日常を重視した持続可能な観光へと転回するとともに、マストツーリズムの普及とともに多数の旅行案内書も刊行されるようになった。現在もその数はますます増加しているが、その端緒はどこにあったのだろうか。江戸時代末期に諸国で刊行された「名所図会」などは知られるが、明治期から昭和初期までの国内観光の具体相はいかなるものであったのか、その実態については、十分に明らかにされてきたとは言い難いように思われる。

近現代神戸と都市観光に関する先行研究としては、観光学分野には、これまでの神戸市における観光行政のあり方の変遷を考察した中尾清³⁾や、戦後神戸における「神戸南京町」の形成経緯を観光という文脈から形づくられたものとして読み解く大橋健一⁴⁾、人文地理学分野においては、近代神戸の盛り場の成り立ちを描きだした加藤政洋⁵⁾らの研究が挙げられる。しかし、昭和初期から第二次世界大戦をはさんで占領期にいたる時期の都市空間の変容については不明点が多く、関連領域である建築学や歴史学、都市社会学などにおいても、当該期神戸に関する史的研究は限られている。そのためか、この時期を考察対象から省いたままに、昭和40年代の観光神戸のイメージのみが取り上げられ、論じられる傾向にあったことも指摘できよう⁶⁾。なお本稿では、都市における盛り場や歓楽街も観光資源とみなされてきた1930年代の神戸市の見方にしたいが、観光を日常から離れてある地域を訪れる現象・行為として広く捉えるとともに、都市形成をすすめる諸力の一端を担うものとして検討をすすめる。

1930年代は、日本の観光行政にとって転換・躍進の時代であった。1927年に経済調査会から「国際観光の振興」に関する答申が出され、1930年に鉄道省に設置された国際観光局によって、

* 日本学術振興会特別研究員、神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期課程

(2013年10月1日 受付)
(2014年2月1日 受理)

外客誘致の観光宣伝活動がはじまる⁷⁾。神戸市においては、この翌年である1931年に秘書課に観光に関する機関が設けられ、1934年には神戸市観光課となり、観光開発のための取り組みが積極的に進められた。

昭和初期の神戸市では、2箇所の観光案内所が主要駅（省線神戸駅、三ノ宮駅）に置かれ【写真1】、複数の観光案内書が発行されていた。1930-1955年のあいだに神戸市観光課（神戸市経済局観光課）、神戸区観光協会が発行した10冊の観光案内書には、一般に「史蹟名勝」と括られるカテゴリーのなかに、現代でいうところの都市観光（アーバン・ツーリズム）に相当するものが含まれた。このうち、戦前神戸の中心地とされた旧湊東区（1945-1980生田区⁸⁾）における「湊川新開地」に関する記述は数多くみられ、旧神戸区（1945-1980生田区）における元町通の大商店街と並んで、神戸市の誇る観光地として紹介されていた。

観光空間のあり方を考えるにあたっては、メディアの描きだすイメージが果たす役割を見過ごすことはできない。そこで、本稿では神戸の観光空間の変遷について、昭和初期から戦後の市内における湊川新開地エリアの位置づけに着目して、神戸市観光課発行の観光案内書に見られた記述の整理と検討を行う。これによって、自治体が発信しようとした〈観光神戸〉の情報とイメージ、湊川新開地の位置づけの変遷を読みとってみたい。また、第2次世界大戦による戦時体制・空襲被害・GHQ占領は、観光地とし



写真1 神戸市観光案内所の広告

出典：神戸市観光課『神戸市公園概況』1937

ての湊川新開地の復興にいかなる影響を及ぼしたのか、あわせて考察したい。

神戸市観光課は1934年以降多くの観光案内書を発行した。そのうち、市内の観光地を列記し紹介するものとして、次に挙げる『神戸観光の栞（1934）』、『神戸観光と土産品の栞（1936）』、『楠公精神発祥の地 神戸（1940）』、『神戸史蹟めぐり（1942）』、『観光の神戸 史蹟と名勝を中心とした（1947）』、『Kobe 観光神戸（1954, 1955）』を分析に用いる。これに加えて、神戸区観光協会や神戸市経済局観光課による観光案内書や、自治体発行に依らない名勝案内の書籍⁹⁾や地図¹⁰⁾、空中写真、同時代的な『神戸新聞』報道による記述、『神戸市史』等を合わせて、空間構造の変容にも留意して検討する。

1. 昭和初期「湊川新開地」の観光空間

1-1. 「湊川新開地」の形成経緯

湊川の付替と湊川公園の形成

明治維新当時にはこの付近一帯は「昼なお暗い程の森林」があり、外国人がよく狩をしていたという¹¹⁾。1873（明治6）年頃の湊川堤付近はまだ寂しい状態で散歩をする人も少なく、また水害でたびたび決壊しており、この補修工事費は一般からの寄付等によって賄われていた。

湊川公園を形成する動向は、1881年に始まった。当時、兵庫県管理していた湊川堤塘が市民散策の地となり、茶店を開くものが現れている状況をみた神戸区がこれを遊園地とすることを構想する。県に交渉してその一部を遊園地として使用料規定を設けたが、特に設備は施さなかった。1891年に市制が実施され、この地の管理も県から市に移り、市は1000坪余を湊川遊園地とすることに決議し、市条例でその使用料を規定した。1895年には市民の寄付によって桜1000本が植栽されたが、枯死または盗奪に遭ったといい、遊園地は1904年に廃止されることとなった。

しかし、1901年に新湊川の開削と湊川の付替えが果されたことから、埋め立てられていた湊川一帯を公園にする計画が再び持ち上がる。1911年11月には、市は30万円でこの地域を湊川改修株式会社から買収して改修工事を行なって湊川公園として開園した。その面積は36,046㎡に及び、旧湊東区の荒田町・福原町と兵庫区松本通・上沢通・下沢通に跨るように位置した。

1924年神戸タワーの成立

1921年に湊川トンネルが完成し、1924年には公園南側に高さ90mの神戸タワーが建設された¹²⁾。公園としてのかたちを整え、市民の野外大集会場として、日常的な催しなどにも広く利用されることとなっていく。

戦前戦後神戸においては「東の浅草、西の新開地」と並び称するフレーズを、よく目にする。ここからは、大正昭和初期の盛り場としての新開地の繁栄をあらわすのみならず、東京浅草への意識の強さが推察される。浅草の凌雲閣（浅草十二階）はお雇い外国人のウィリアム・K・バルトンによって設計され、高さ52mのタワーとして1890年11月11日に建設されたが、1923年9月1日の関東大震災によって半壊、1923年9月23日に解体された。その翌年に建設された神戸タワーについて、その建設経緯は明ら

かにはなっていないが、1930年発行の『神戸市商工名鑑』によると、株式会社神戸タワーの代表者は住野春七（下沢通1丁目21）、営業種別は「天体観望」であった¹³⁾。

このタワーからの眺望は、当時の中心市街地と歓楽地区となりつつあった南部の新開地本通りから臨海の川崎造船所までを広く眼下に収めていた。それはまさに、訪れる人びとにとっては、観光地としての湊川新開地を客体化する施設であり、神戸における近代観光地成立のひとつの契機でもあったと言えよう。

1930年 神戸海港博覧会の開催と湊川水族館

1930年には神戸において観艦式記念海港博覧会が開催され、第一会場を兵庫埋立地、第二会場を湊川公園、第三会場を関西学院跡に置いて、1930年9月20日から10月末日まで開かれた。これを報じる1930年9月28日付『大阪朝日新聞』には、第二会場の湊川公園について、次のように記されている。

第二会場 湊川公園

神戸市随一の盛り場新開地に隣合っているだけに余興にも随分面白いものがある、芸者の手踊り、海女の鮑取りなど艶ッぱい。ここは水産館、海洋館、水族館の三つが設けられて魚の棲息状態から漁業に関する絵てを見せ、海洋の神秘、一万種からの貝類の陳列、気象学上の奇現象など誰にでもわかるよう仕組まれ電飾灯スカイ・サインなどで景気を添えている。（『大阪朝日新聞』1930年9月28日付）

1934年頃の湊川公園には、勸業館、聖徳太子や大楠公の銅像、音楽堂、湊川水族館など数多くの遊園施設がみられ、この水族館は、1930年の博覧会時に神戸市水産会によって洋瓦葺の木造二階建てで会場入口の東隅に建設され、内部は木摺り漆喰塗壁、水槽は鉄筋コンクリート造、1m角厚さ約2.5cm（及び約3.2cm）のガラスが使用された¹⁴⁾。【図1】ここでは第二会場の余興として「芸者の手踊り」と「海女の鮑取り」が並べられ、「艶ッぱい」と評されている。この記述からは、福原を隣地に擁する湊川新開地において女性による見世物的な要素を求められた世相が読みとれる。この4年後に神戸市観光課によって発行された観光案内書『神戸観光の葉（1934）』には、湊川水族館は次のように紹介され

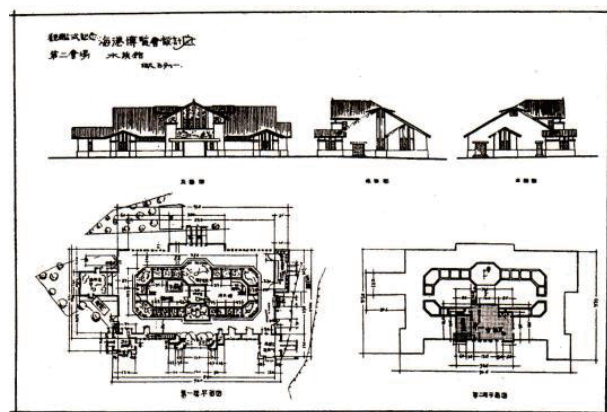


図1 1930年に建設された湊川水族館

出典：石田修二編『観艦式記念海港博覧会誌』
神戸博覧会協会 1931

ている。

収容魚類の豊富なること、諸設備の完備せること、共に海港都市の誇りとするに足る。一度館内に足を入れるや都塵雑踏を忘れ忽然として幽邃佳絶の境域を彷徨するの感あり。殊に七月十五日より九月二十日頃までは海女水槽中に潜り真珠取りの実演を見せるは誠に以て珍景である。（神戸市観光課『神戸観光の葉』神戸市 1934）

水族館の外部と内部とを、「都塵雑踏」と「幽邃佳絶」という語で対置させる記述にみられるように、同時期の新開地本通り【写真2】はたいそう騒がしかったという¹⁵⁾。7月15日から9月20までの夏季に、真珠取りの海女の実演を水槽で見せるという試みについては、昭和初期に養殖真珠ができて以来、欧米への真珠輸出が盛んとなり、国際貿易港としても繁栄がみられた1930年代の神戸市の貿易産業状況との関連性が推察できる。

同館は、第二次世界大戦による戦禍が厳しくなった1943年末に閉館され、1945年3月17日の神戸大空襲によって焼失した¹⁶⁾。

昭和初期の神戸市の交通網整備における湊川新開地の位置づけ

1927年には、神戸有馬電気鉄道株式会社の地下乗入れ工事のため、湊川公園の大半が掘削された。1928年に半地下の形態で湊川駅が開業し、2年後の1929年にはその損失補償金によってさらなる改園工事が行われたという¹⁷⁾。

東海道線は1889年に東海道線（新橋—神戸間）が全線開通して、1917年には神戸市に電気局が発足し、市電の運行が始まった。東海道線¹⁸⁾については、1918年から1935年のあいだに灘駅から鷹取駅間の高架改築工事が終わり、線路と道路が立体交差となったことで、神戸駅付近にも数多くあった踏切がなくなり、市内の交通はスムーズになっていった。

昭和初期の「神戸市観光地図」を見てみると、充実した交通網が書き込まれており【図2】、なかでも湊川新開地と関わる立地にあるのは、省線、市電、市営バス、神有電車で多く、同地は市内の交通の結節点となっていったことがわかる。また、1936年に運行を開始した市営定期観光バスは、毎日午前9時に神戸駅前を出発して、約6時間、約70kmにも及ぶルートで大人1円20銭



写真2 1930年代の新開地本通りの様相

出典：神戸市観光課『神戸観光の葉』1934

の乗車料金を走ったという¹⁹⁾。当時の市バスの普通区料金は10銭に過ぎず、現在の貨幣価値に置き換えるならば、市バスは200円、観光バスは2400円といったところだろうか。なお市電は普通券が6銭で営業時間が午前5時から翌日の午前1時と、市バスの午前6時から午後11時半と比して2時間半も長く、より大衆的な「市民の足」としての交通機関であったといえよう。

1-2 観光案内書にみる〈観光神戸〉イメージの変遷

昭和初期に神戸市観光課によって発行された観光案内書においては、市内の数多くの史蹟名勝が並ぶなかに、代表的な都市観光空間として「湊川新開地」も紹介されていた。これにみられる湊川新開地へのまなざしの基調は変わらないが、表現は少しずつ異なっている。本項では、昭和初期から占領期のあいだに発行された複数の観光案内書を資料とし、これらにみられた〈観光神戸〉のイメージに言及する記述の整理を行い、自治体が発信しようとした情報および湊川新開地をめぐるまなざしの変遷を読みとってみたい。【表】

市内における湊川新開地の地理的な位置づけは、1934、35年にみられた「神戸の中央部」という記述から、1936年以降には、旧湊川の河床の埋め立て地という成立経緯や、湊川神社から多聞通りを西へ七丁（約763m）進んだ地点が新開地本通りの中央であることなど、詳しくを増し、その性質は一貫して「愉楽」「歓楽」という言葉であらわされた。

他地域への言及に注目すると、1935年には他都市における盛り場が比較対象とされている。ここで列記されたのは、東京の浅草、京都の新京極、大阪の道頓堀、千日前であり、いずれも古く

より名の知られた、現在まで続く繁華街である。また、有馬温泉へのアクセスを強調した背景には、1928年に湊川公園下にターミナルとなる湊川駅を開業した神有電車（神戸有馬電気鉄道）等の、交通網の発達によって観光空間も拡張され、近郊地域との結びつきが強まっていった当時の状況がうかがえる。

観光資源として紹介された代表的なものは、劇場、映画館、アイススケート場、レストラン、カフェであり、その他各種の店舗とされたなかには料理飲食店や小売店舗の集積があったとみられる。なお、1940年の紹介において料飲店が「料亭」と記されているが、これは、湊川神社と新開地を一体の観光地として紹介するにあたって、元町通やトーア・ロードなどの異国情緒と対置させた、日本的な歓楽街の象徴とする思惑によるものではないかと考える。そのためか、風景描写においても、騒がしさや無秩序なさまを感じさせる表現は抑えられていた。

戦後2年が経った1947年には、史蹟と名勝を中心とした観光案内書が発行された。同書において、「湊川新開地」は詳しく語られることはないものの、戦前から市内中央部の第一の都市観光名所として「名勝の一つといへる」という認識が示された。

こうした盛り場として賑わう新開地の風景は、自治体の発行した案内書のなかでは欠かさず、「股賑雑踏を極めている」と説明されていた。その実態は、神戸市に住む安治博道と福原潜次郎によって1930年に発行された『神戸附近名勝案内』に詳しく、次のように描かれている。

湊川新開地は福原遊郭に隣接したる市内第一の熱鬧地なり、其地区は旧湊川の川床にして明治三十年、河道変更の案成るや、

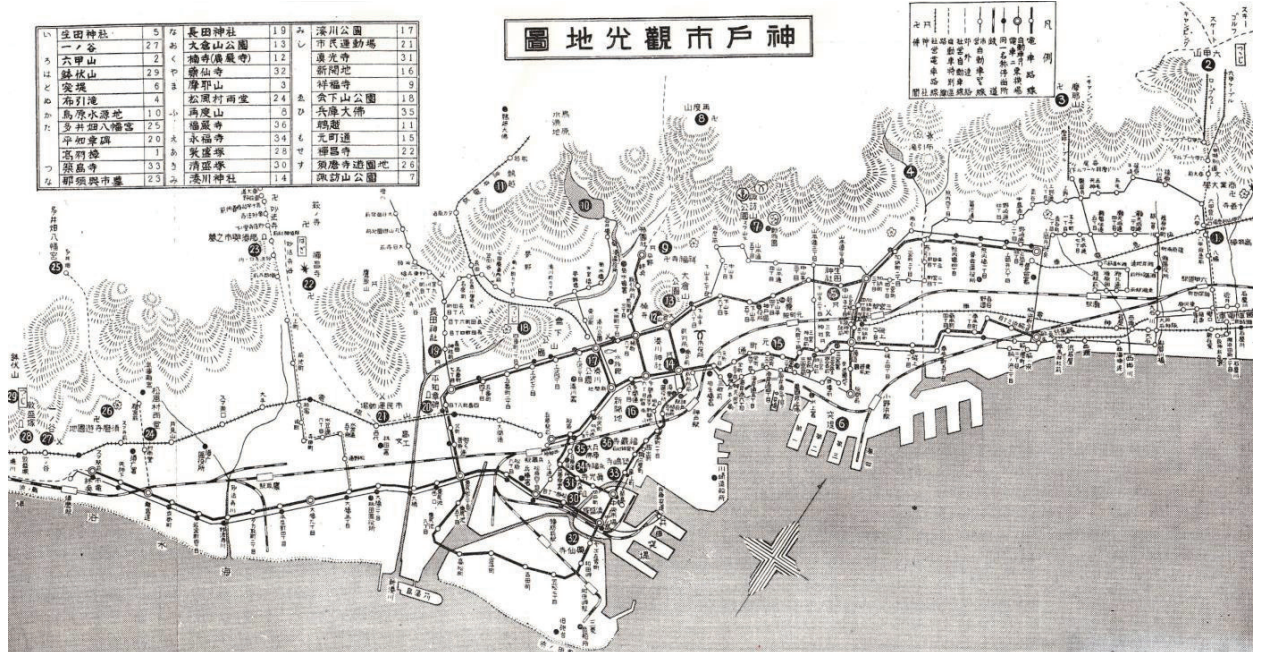


図2 「神戸市観光地図」⑭に湊川神社、⑯に新開地、⑰に湊川公園が記されている。

出典：神戸区観光協会『神戸観光要覧』神戸区観光協会 1935

表 神戸市観光課発行の観光案内書にみる「湊川新開地」をめぐる記述の変遷 (1934-1947)

発行年	タイトル	市内の位置づけ (地理)	市内の位置づけ (性質)	他地域との関係	観光資源	風景描写
1934	神戸観光の葉	神戸中央部	愉楽地	-	劇場、映画館、アイススケート場、レストラン、カフェ	最も股賑雑踏を極めている
1935	神戸観光要覧	神戸中央部	一大歓楽境	浅草、新京極、道頓堀、千日前	劇場、映画館、アイススケート場、レストラン、カフェ	最も股賑雑踏を極めている
1936	神戸観光と土産品の葉	旧湊川埋立地の一部	-	-	劇場、映画館、アイススケート場、レストラン、カフェ	最も股賑雑踏を極めている
1940	楠公精神発祥の地 神戸	湊川神社の西方七丁の地点	歓楽街	有馬温泉	映画館、劇場、料亭、神有電車	渾然たる
1947	史蹟と名勝を中心とした観光の神戸	湊川の流路址	名勝の一つ	-	-	-

直に工事に着手し先づ東西の両堤防の取除き地を均し数年にして広漠たる市街地の出来を見たり、是れを湊川新開地と云ひ、大小劇場、活動写真常設館、寄席見世物並びに各種料理店、飲食店商舗等大道路を挟みて、或ひは横町の露次に軒を列ね、旗幟、幔幕水引の色どり、宛ら花のトンネルを作り、客を呼ぶ声、騒がしき楽隊の音に打交りて、殆んど耳を聳せむばかり、中には鮎、天麩羅、饅頭、蕎麦、安値洋食と食ひ物屋のみを以て一廓を作れる所もあり、電車道其間を突切りて、北手の阪も亦同じ大歓境となり、市人到る所に渦を作し、其混雑、大阪の千日前を凌ぐ程なり、新開地は神戸、兵庫の中央に当り、是等の群衆は東西より流れ入り流れ去る。(安治博道、福原潜次郎『神戸附近名勝案内 神戸を中心として：前編』赤西萬有堂 1930)

1930年代の「湊川新開地」を語る近隣住民の声は雄弁である。地形、各種の娯楽施設、そして路地に並ぶ小さな店舗群に目を向け、新開地本通りの華やかな様相が描かれた。劇場や活動写真常設館や料理飲食店、商店といった店々の前に色とりどりの旗やのぼりが立てられ、劇場前には幕も張りめぐらされた風景は、絵葉書や写真からもうかがえる。さらに、楽隊の演奏する音楽や客を呼ぶ声が飛び交い「殆んど耳を聳せむばかり」であったという。これらには、視覚的にも聴覚的にも、うるさいまでに鮮烈な大歓楽街としての賑わいがあらわれている。

料飲店が建ち並んで一画をなしている場所もあったといい、多種多様な営業品目として、鮎、天麩羅、うどん、蕎麦、安価な洋食などが列記される。この視線は、省線神戸駅寄りの新開地南口を起点として、坂道を上へと歩きながら、本通りの両側へと目を転じているようだ。多聞通りを走る市電軌道を越えて、さらに北側へ向かっても「大歓境」は続き、その混雑は「大阪の千日前を凌ぐ程」とも描かれ、神戸ひいては兵庫の中心地としてこの歓楽街を誇らしくみる市民のまなざしが読みとれる。神戸市にとっては、昭和初期の1930年代こそが、元来有していた風光明媚な自然環境に加えた観光開発によって、都市空間における娯楽施設の設置も進み、観光地としての魅力を高めていた時期であったのだろう。

2. 第2次世界大戦による空襲被害と戦争直後の湊川新開地

神戸市における第2次世界大戦時の空襲被害は大きく、罹災面



写真3 1945年9月、多聞通りとの交差点から南東の新開地本通りの焼け跡を望む。手前は戦災を受けた映画館。

出典：兵庫県立神戸高校所蔵写真帳

積は市街地の約6割にも及んだ。湊川新開地もまた1945年3月17日の神戸大空襲によって火の海となり、娯楽施設も住居・店舗も大半が焼失した。【写真3】終戦を迎え、焼け野原に残ったわずかな建築物は、やがて来神した進駐軍によって接収され、同年末にかけては土地の接収とキャンプの設営が行われた。本項では、これと並行して市民によって進められた湊川新開地の都市再建の様相を、進駐軍との関係性に着目しつつ明らかにしたい。

2-1 湊川新開地における戦災とヤミ市の生成・展開

神戸市内にあらわれたヤミ商人が問題として取り上げられたのは、終戦からひと月が経った1945年9月の中旬のことであった²⁰⁾。10月にかけて商人の増加傾向はとどまらず、複数の鉄道駅周辺にヤミ市が生成された。なかでも規模が大きかったのは三宮の高架下と湊川新開地と省線神戸駅前で、群を抜く混雑ぶりは他府県にも聞こえたほどであった²¹⁾。この秩序化を図る進駐軍の意向にしたがって、行政は組織化を推奨し、1945年12月から、それに応じるかたちでマーケット化が進められた。このとき、三宮地域には在留外国人、湊川新開地にはテキヤ組織による商業組織が形成された。これはヤミ市から内発的に生まれ、その後の管理組織としてもイニシアティブを有した。他地域のヤミ市に対する強制撤去と異なり、神戸においては兵庫県警察部の独自の方針で自治的な組織化が推奨され、県警に招集された複数組織の代表者協議によって方針が決められていった点が特徴的であった。

湊川新開地においては、大正昭和初期を通じてテキヤ組織が場をとりしきって露店を出してきた経緯があった。新開地本通りにおけるヤミ市取締りは三宮地域よりも早く、1945年10月1日には第1回兵庫署による取締りが行われた。神戸神農露商連合会による露店の管理は、戦後の応急的な雇用対策としてなかば公認であり、マーケット化が進んだヤミ市は、年末にかけて「自由市場」²²⁾と呼ばれるようになっていく。「神戸清睦会」「華神会」「露友会」などの組織も、新開地本通りやその横丁に市場やマーケットを形成して、商店街としての盛り場の復興が進みはじめた。

2-2 湊川新開地における接収開始と生活再建

兵庫区における進駐軍の接収は、主に1945年の年末から始まった。黒人兵舎のウエスト・キャンプと倉庫、駐車場として接収された土地が大半を占めており、焼け残った建物が多くなかったこ



写真4 1946年11月、神戸駅から湊川新開地一帯

出典：国土地理院 USA-M324-A-6-51 (1946年) より筆者作成

とも影響したのか、接収建築物については生田区と比してわずかであった²³⁾。このうち工場を除いて最も大きなものは、新開地本通と多聞通が交差した北西角に位置した「聚楽館」と呼ばれた松竹映画株式会社所有の建築物であった。これは劇場として使用され、期間は1946年4月17日から1952年6月10日まで6年間に及んだ。このほか、福原町の松竹株式会社や、湊町3丁目の元丸玉キャバレーなども接収されたが、その詳細は手がかりがなく不明である。

ウエスト・キャンプは兵庫区古湊通・西多聞通、生田区相生町ほか一帯を接収して黒人兵の駐留地として設置され、その立地はまさに省線神戸駅から西へ約300mの距離であった。【写真4】南北に走る省線神戸駅にとってはこの場所は「オモテ」にあたり、他府県から神戸に買い物に訪れる人びとの動線を妨げるようにキャンプは広がっていた。その西端は新開地本通の東方すぐに接しており、1946年5月から6月にかけては、新開地の東側において、ウエスト・キャンプに近接する居住者に対して「衛生、風紀、美観上に支障あり」と進駐軍による立ち退き命令が下された²⁴⁾。これには、160世帯の居住者から市長・知事への陳情が行われ、地元有力者の積極的な交渉もみられた。この結果、表通りの70坪については立退きを免れたが、兵舎の鉄条網から50尺(約15m)の間の清掃を行ったうえで、高さ2間(約3.6m)の板塀の建設が求められることとなった²⁵⁾。

このウエスト・キャンプの治安維持の方針と居住者の戦災からの生活再建とのあいだに生じた「境界のせめぎ合い」は、三宮地域のイースト・キャンプと居住者のあいだにも類似の現象がみられており、占領初期の都市空間に特有であったことが窺える。

3. 占領下の湊川新開地と〈観光神戸〉の復興

前項までにおいては、1930年代の湊川新開地が歓楽地区として〈観光神戸〉の重要な存在とみなされるようになった経緯と、戦争・空襲といった空間変容による断絶と生活再建の状況を明らかにした。同地が盛り場として市内に占めるその地位は、戦災を受けて劇場や映画館等の娯楽施設の大半を失ってもなお疑う余地はなかった。1946年3月14日に定められた神戸市復興基本計画要綱においては「慰楽地区」として三宮楽天地・湊川新開地・灘水道筋・長田六間道等が指定され、神戸市教育・文化復興計画要綱のなかにも「観光」のうち「慰楽地区」を担う地域として、三宮楽天地・新開地・水道筋・西新開地が挙げられた²⁶⁾。このほか、戦災復興初期の『神戸新聞』記事においても、同地の賑わいを取り戻すために戦前からの業者や行政が策を講ずる様子が報じられていた。

3-1 戦後新開地における興行街再建の初動と復興街路計画の相克

新開地復興の要は、興行街としての再興を果たせるかにかかっていた。1945年10月には、新開地のこれからに言及する記事が神戸新聞紙上でも散見される。

1945年10月17日付『神戸新聞』では、「賑わを取り戻した盛り場」として新開地復興を描く記述がみられ、1ヵ月前に市内各所で問題視された食糧売りのヤミ市だけではなく、サーカス・露店・焼け残り映画館に多くの人びとが集まっている新開地の賑わ

いが「新しい風景」と称され、やはり「焦土と化した新開地も神戸ではただ一つの盛り場らしい盛り場」だと認める記述が見られた²⁷⁾。しかし、1週間後には同所について「途方もない光景」と正反対の評価があらわれており、新聞記事に見られる状況への評価の揺れは、興行街としての新開地再興という理想と現実のはざまの市民の葛藤と不安を示していたのだろう。

また、新開地本通りの12間道路は「複雑な雰囲気の魅力」を有していると表現され、その両側に映画館や劇場、飲食店が集積した湊川新開地は、興行街としての賑わいを誇る市内随一の盛り場として位置づけられていた。しかし、戦災によって映画館・劇場は15館が焼失し、聚楽館と松竹座の2館のみが焼け残る状況であった。

映画、演劇、寄席その他興行物については、1945年8月22日から復活再開が許可され、内務省による健全明朗な国民生活再建への期待から、戦時体制の夜間の上演制限も撤廃されていた²⁸⁾。映画再開の動きは市民にたいへん喜ばれたことに加えて、「国民文化の再建に歩調を合せた娯楽慰安の確立が必要」(1945年8月28日付)との見方から行政にも推奨され、映画館再建には期待がかかった。限られた資本と電力のなかでの興行街の復興には、採算度外視の熱意が必要であるとして県当局も力を入れていた²⁹⁾ようだが、復興街路計画の進捗は思わしくなかった。

1945年10月時点の復興計画では、新開地本通りを12間から30間へと拡幅することが決まっていたのである³⁰⁾。この通りに沿って、かつての立地のままに興行街を再建すれば、近い将来に立退かざるを得ないことが予測された。しかし、1945年が終わろうとしてもなお復興都市計画街路の決定は基本方針や提案にとどまり³¹⁾、具体的な街路計画は、1946年5月6日戦災復興院告示第29号による幹線58路線の決定告示に始まった。なお、この告示の後にも同年8月14日戦災復興院告示第72号によって主要幹線街路の公会点および国鉄等の駅前に広場を設置するとともに、既定計画中の16路線の変更や、補助幹線街路69路線の追加といった内容が告示され、戦後1年が経過してようやく街路計画は樹立された³²⁾。こうして、早期から志された興行館の新設は待たされる状況にあったようだ。

また、同時期には、資本が足りないために劇場再建は難しいと報じる新聞報道もみられており、これによると、定員300人から500人の映画館を造るためには、バラック建築費用だけでも40万円、映写設備その他で40万円を要したという³³⁾。多くの人びとが住居もなく衣類やその日の食事にも事欠く窮乏期に100万円



写真5 1947年、復興の進む新開地本通り

出典：写真3に同じ

の資本を調達することは難しく、まずは復興計画の進捗を待つほかになかったが、次第にバラック建ではあるものの娯楽施設の再建も進んでいく。【写真5】

3-2 湊川公園商店街の形成と娯楽施設の復興プラン

1946年8月「湊川公園商店街」の開業

1946年4月には、上海や漢口からの引揚者が兵庫県内のみでも約1万人に達しており、生活にも逼迫を加えていることが報じられた³⁴⁾。兵庫県厚生課内に事務所を置く「華中引揚兵庫県人互助会」が設立され、同会の会長には元神戸市議の山口敬一氏、副会長には若木正男氏が選ばれた。

低調な引揚者の就職状況を受けて、引揚者救済目的の商店街の計画が持ちあがり、湊川公園への建設が決定した。1946年6月22日午前11時市役所に集まった130余名の引揚者は、引揚者連盟神戸副支部長となった山口敬一氏を中心として実現協議に乗り出した³⁵⁾。同計画は、店舗開設希望者による2000円ずつの出費を予算として一間半のバラック店舗を150戸開設し、県市に援助資金と建築資材の応援を求めると決められ、この建設にあたっては自主的かつ合理的な事業推進が図られることとなり、委員制による金融・建築・事業部を設けることが決められた³⁶⁾。

そして、1ヵ月後の同年7月には、着々と進みつつある新たな「新開地大歓楽街」の建築工事について詳細が報じられた。同計画は上海からの引揚者である元市議山口敬一氏の主導によるもので、引揚者の再起を目指すものであった。このために「(神戸)タワーの植木義邦氏の協力を得、神農会とタイアップして」(1946年7月23日付)、バラック店舗約300戸による一大マーケットを開設することになったのである。また、建設にあたっては着工から1ヵ月で1946年8月上旬の完成が見込まれ、「山口組の福田佐賀一氏らの損得を度外視した美しい建設作業が実を結んだ」(1946年7月23日付)と評された。完成した商店街の通路には引揚者の郷愁を表して「ハルピン路」などと愛称がつけられて盛況であったようだ。【写真6】

湊川公園における娯楽施設の復興プラン

この時、こうした生活再建の商店街形成に加えて、湊川新開地の地域性を示すような娯楽施設の復興プランもあらわれた。1946年7月23日付『神戸新聞』の記事によると「タワー中心に神戸に浅草を凌ぐ歓楽街 国際色も豊かに不夜城を」として、次のように報じられた。



写真6 1947年の湊川公園商店街 出典：同前

開店祝いには夏中豪華な花火大会をひらくほか、夜相撲を無料公開するなど大いに顧客の吸収につとめる。そしてこれを単なるマーケット街にするだけでなく、タワーを中心に東京の浅草六区をしのぼす大歓楽地帯「神戸の浅草」を現出すべく、ちかく旧水族館跡に山口組の手で映画館一館を建設するほか、その昔坊や嬢やに親しまれたスポーツランドをも再現しようと同じ経営者である神田有氏が計画しており、これらが一斉に完成したあかつきには夜もまばゆい百燭燈をふんだんにともして、文字どおり神戸の浅草——大不夜城を現出せしめようと意気こんでいる。(1946年7月23日付)

まだ食べることに事欠いていたような時期である1946年の夏、湊川公園では東京の浅草を引き合いに出して、民間の力で映画館やスポーツランドの建設を目指す動向がみられた。このことは、同地域に対するまなざしが、戦前から戦後にいたるまで一貫しており、歓楽地区としての娯楽施設の復興に大きな期待が寄せられていたことを示している。

3-3 戦後神戸の都市観光の復興

戦後復興期の兵庫県、神戸市の観光行政の立ち上がりは早かった。1946年には神戸市渉外部観光課や、民間の神戸観光協会も成立し、同時期には兵庫県計画課を事務局とした国土緑地協会も置かれた³⁷⁾。生活再建も途上のうちから観光行政が重要視された背景には、観光が貿易振興と並ぶ外貨獲得の手段とみなされ、経済政策の一環として位置づけられたことが影響していた。

1947年に神戸市観光課が発行した『観光の神戸』には史蹟を中心とした市内の観光地が紹介されたが、その附録には「ニューコオベに於ける代表的旅館交通物産を中心としての宣伝主張」と謳った特集がみられた³⁸⁾。ここでは、市内の観光界を担う人物として、神戸政経評論社の北野秀雄や神戸観光株式会社の取締役社長であった西井篤胤らによって、これからの日本および神戸における観光事業の理念や方向性が論じられ、「観光神戸への提言」として交通・施設・旅館・商店街・土産物の今後について、北野の意見が次のように示されている。

一、交通：交通機関の整備—道路の近代化、自動車道路の完成、観光バスの充実、ケーブルカー・水上観光船等の整備—せめては電車、自動車の車体やガラスの補修と正しい交通徳が望ましい。

二、施設：衛生と健康を条件とする旅館、そして安心して宿泊できる日本式ホテルの整備、海と山の神戸の風致を生かし、而も神戸の歴史と自然に対する科学的考慮による施設、特に神戸色豊かな博物館等の設置。

三、旅館：清潔と親切であること、特にサービスは豊かな愛情と、高い教養が望ましい。遊蕩的気分や、殖民地気質は国際港都の忌はしい恥である。飽くまでも健全で明朗でありたい。

四、商店街：実直であり明るい感じのする純日本風の店舗でありたい。そして専門的であること、値段の公示と親切な店員のサービス、特に日本的なエチケットが望ましい。清潔で明るいことや、勘定の敏速であることも望ましい。

五、土産物：神戸色の濃いもの、値段よりも品質の良いもの、恒久的な愛玩に堪えるもの、より日本的なもの、美味であり実用的であるもの、特に昔なつかしい名産と特産品の復活と増産が望ましい。(神戸市観光課『観光の神戸 史蹟と名勝を中心とした』1947：附録)

これによると、1947年の現状として望ましくないものと感じる要素としては、〈遊蕩的気分〉や〈殖民地気質〉が挙げられており、治安が乱れた戦争直後の混乱した都市の状況が、改善すべき悪しきものと対置されていたようだ。旅館・商店街・土産物については、海外からの旅行者を迎えることが想定されている。これは、1947年8月の民間貿易再開や、1948年7月の一般外国人への観光旅行の制限つき許可など、戦後国際観光がはじまる潮流のさなかの民間による提言である。その背景からは、行政も民間もすでに国際性を意識した〈観光神戸〉としての復興に意欲的であったことがうかがえる。

また、戦後初期の〈観光神戸〉が目指そうとしていたのは、風光明媚かつ〈国際港都〉として繁栄をきわめた1930年代の“神戸色”を取り戻すことであり、さらには〈日本的〉なイメージを高めようとしていたことも読みとれる。それは、敗戦とそれに伴う占領下の日常で、〈日本〉へと示される都市のあり方をうけて、観光に携わる地方行政ないし民間事業者といった主体のビジョンが徐々に形づくられていくプロセスでもあったと言える。しかし、この一方で、占領下京都の国際観光振興に関する研究においては、日本文化を否定して米国に偏重した考え方や、誤った「国際化」に進んだという指摘もみられている³⁹⁾。占領下の都市空間をめぐるポリティクスは複雑であるため、国際観光についてもまた地域や時期の特性を鑑みた検討が必要であろう。なお「健全なるレクリエーション」を推奨する動きは、戦時下の日本において、ドイツですすめられた余暇の用い方を模範とみる文脈で生じていたと考えるが、この価値観の戦後への連続と断絶についてはさらなる検証の余地があるため稿を改めたい⁴⁰⁾。

3-4 神戸博第2会場としての湊川公園

1950年には、兵庫県、神戸市の主催によって日本貿易産業博



写真7 1950年 神戸博開催前の湊川公園の様相。公園北部から南部に建つ神戸タワーとその足元の湊川公園商店街をのぞむ。
出典：日本貿易産業博覧会事務局編『日本貿易産業博覧会“神戸博”會誌—1950年』日本貿易産業博覧会事務局 1957

覧会、通称「神戸博」が催されることになった。1950年3月15日から6月15日まで、神戸市王子公園附近一帯を第1会場、湊川公園附近を第2会場として、協賛には神戸商工会議所、兵庫県商工会議所連合会、神戸貿易協会、その他多くの県内団体が名を連ねた⁴¹⁾。この第1会場は当初から王子公園と決まっていたが、第2会場の選定には難航し、市区合併する前の旧神戸市内に絞られたなかから、鐘紡跡、六甲山上、有馬、須磨海浜公園、布引公園等といった数多くの候補が挙げられた。最終的には、神戸市の中心部をという会議所方面の意向を取り入れて、王子公園と湊川公園の2箇所案に決定した。

第1会場であった王子公園についてはまもなく測量整地が進捗していくが、第2会場候補として挙げられていた湊川公園には、前述の湊川公園商店街が存在した。【写真7】これは、公園全体およそ3000坪のうち、南部2500坪を利用したもので、1946年8月の開業から1年間の無償貸与契約がなされていた。約3000㎡の広さには321戸のバラックが建てられ、その大部分が店舗兼住居の形態で賑わいを見せてつ、すでに3年以上を経過していた⁴²⁾。

この会場選定に関して、事務局は一会場を主張していたにもかかわらず、湊川公園への第二会場の設置が推されたのには、次の2点の理由があったと推察されよう。一点目は、湊川公園は明治末期の開園から、昭和初期の博覧会にとどまらず、日常的なあらゆる催しに利用されてきて、市民にとって「最も馴染深い場所」であったという経緯。そして二点目は、神戸市の東部である灘区に位置する王子公園から市中心部の歓楽・商業地区すなわち湊川新開地へと、観客を誘引したいという思惑である。【図3】

実際に、1950年6月に神戸博を訪れた米国人が撮った写真を見てみると、その思惑は功を奏したように見える。【写真8】第2会場の湊川公園から南へと下った新開地本通りの八千代座前で撮られた写真には、鈴蘭灯のもとに「神戸博協賛」と書かれた提燈が掲げられ、後方に神戸タワーがうつつている。同じ撮影者による他の写真においては、第1会場である王子公園でのパビリオン前でもこの女性の姿が見られたことから、第1会場の豊富な展示内容や野外劇場の催しものを観たあとに、神戸市電か観光バスで湊川新開地へと移動して、第2会場の湊川公園を訪れたのちに



図3 1950年 日本貿易産業博覧會“神戸博”会場案内図
出典：神戸市渉外部観光課『観光関係法令集附録』1949 広告

は新開地本通りを散策したことが推察できよう。

1949年3月末に湊川公園商店街の占用許可が打ち切られたものの、その立退きは難渋をきわめ、最終的には博覧会のわずか9日前の、1950年3月6日になって全戸の移転が完了する運びとなった。こうして第2会場となった湊川公園には、衛生館・農業機械館・日光館・サーカスが設置された。王子会場においては造園にも注力し、建物本位の植栽にならぬようにと、起伏多く次第に高く連なる地形を効果的に活かして建築物との調和をはかり、導線の修景にも心がけられた一方で、湊川会場は時間的な制約も影響して既設公園の広場が利用され、貝塚伊吹梧桐を植栽するにとどまった。

衛生館は、類廃する衛生文化の世相を受けて、性徳の低下、結核患者の激増、各種伝染病、寄生虫病の恐怖等の問題が取り上げられ、衛生思想の普及と啓蒙に資する内容が目指された。内部は、衛生機械、食品衛生、結核、環境衛生、特別室、映画室の6部門に分けた展示配置が行われ、標本や実物は京都大学医学部、名古屋大学医学部、兵庫医科大学、須磨病院が出品について協力した。農業機械館は、全国における最も優秀な生産業者を選抜し、輸出用並びに国内の農業経営上、特に必要な農業用機械具に主体をおいた出品展示が行われた。出品数は1236点、出品者は137商社、1都1道2府19県に及び、大々的に実演を行うことで知識が深まるようにと計画されていた。日光館では、240坪の館内に、11年を要して製作されたという日光東照宮の縮尺十分の一の模型が陳列された。このほかサーカスや温泉の町有馬の観光協会と神戸電鉄がタイアップした宣伝目的の無料休憩所が置かれ、賑わいのなか、1950年6月15日に閉会を迎えた。

おわりに

昭和期の都市空間の変容を考えると、第二次世界大戦と占領による影響は看過できない。戦災によって破壊された都市が建設によって再びその姿を築くように、観光の思想や形態もまたかつての精神を残しながら、時代に適応しつつ新たなイメージを形成していった。本稿は、そのプロセスの一端を、昭和初期から戦後にかけての湊川新開地という都市観光空間をめぐる社会的認識や



写真8 1950年6月、新開地本通りの八千代座前。後景には神戸タワー。出典：the Gerald & Rella Warner Japan Slide Collection (195006). Kobe Shopping District. the East Asia Image Collection at Lafayette College. Retrieved September 25, 2013, from <http://metadb.lafayette.edu/download.html?item=warner-slides-japan-0014>

言説の変遷から読み取ることを目指した。

明治末期の湊川の付替えによって形成された湊川公園と湊川新開地は、同公園を会場とした博覧会の開催や娯楽施設の建設や交通網の発達を通して、神戸市随一の都市観光資源として人びとを集める場所となった。旧来、海と山を抱いて眺望のよい風光明媚な地域性を誇りにしてきた神戸市であったが、これに加えて、市街中央部と湊川新開地という一大歓楽境を視野におさめる望遠施設として大正末期に神戸タワーが建設された。これは観光地の象徴となるとともに、風景を客体化するものでもあった。

昭和初期に神戸市観光課によって発行された観光案内書には、一貫して湊川新開地が歓楽地として紹介された。その記述からは、多数の娯楽施設や料飲店を要する兵庫県の中心地として、1930年代の〈盛り場〉新開地は「名勝」とみられていたことがわかった。

戦後復興期の湊川新開地は、小売商業の再建については戦前からのテキヤ組織の采配によって順調に進んだが、生活空間の再建にあたっては、東に隣接する進駐軍のウエスト・キャンプとの関係に悩まされた。その近接した距離から、進駐軍によって美観や衛生の問題点が指摘され立退きが迫られたが、境界をめぐる折衝を繰り返した結果、妥協点が見出され、板塀が建てられた。

観光行政主体としての兵庫県・神戸市は、戦争直後から全国に先駆けて動き出していた。新開地においては復興街路計画と興行街再建の矛盾が顕在化したが、終戦から1年ほどで、新開地本通り沿いには複数の小売市場、湊川公園には引揚者マーケットが生じ、あわせて園内の娯楽施設再建も明るい話題となっていた。民間においてもまた観光協会や観光関連会社が形成され、1950年に開催された日本貿易産業博覧会「神戸博」を契機に神戸観光協会は神戸国際観光協会へと発展解消し、国際観光を掲げる時代が訪れた。一方で、湊川公園を生活空間としていた引揚者マーケットは、神戸博の第2会場に決まった同地からの立退きを余儀なくされた。

そして、占領期が終わった1955年前後には、湊川新開地は盛り場として復興したが、かつてのように観光資源とみなされることはなくなっていた。1950年以降の同地の具体相については多様な語られ方がみられるが、三宮の中心市街地化の勢いに押されるように衰退した過程についてもまた、さらなる検証と位置づけが必要であると考えられる。このように、昭和初期まで一大歓楽街であった湊川新開地は、戦後まもない観光事業が経済政策の一環として位置づけられ、官民一体となって戦後〈観光神戸〉を構築していく流れに翻弄された場所であった。

注

- 1) ヴォルフガング・シベルプシュ著、加藤二郎訳『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局1982、ジョン・アーリ著、加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局1995。ジョン・アーリはミシェル・フーコーの「まなざし」の概念(知覚は社会や権力の網の目のなかでかたちづくられる)を観光現象に援用して「観光のまなざし」論を展開した。
- 2) アラン・コルバン著、小倉孝誠訳『風景と人間』藤原書店2002
- 3) 中尾清『都市観光行政論』たいせい2005

- 4) 大橋健一「『神戸南京町』の再構築と観光」『立教大学観光学部紀要』第2号：36-40
- 5) 加藤政洋『神戸の花街・盛り場考—モダン都市のにぎわい』神戸新聞総合出版センター 2009
- 6) 遠藤英樹「神戸：風景の政治学」『ガイドブック的！観光社会学の歩き方』春風社 2007。1980年代前後に「ミナト神戸」の観光空間として形成されたイメージと明治期の風景形成との歴史的な断絶について言及されている。しかし、風景の生成プロセスにおける排除については、大正・昭和期の神戸の市街地形成と戦災被害・占領下の復興といった空間的な連続と断絶の文脈については必ずしも十分に検討されているわけではない。この点にも目を向ける必要性がある。
- 7) 新井克爾『観光の日本と将来』観光事業研究会 1931, 新井克爾『鉄道運輸論』春秋社 1936, 国際観光局編『観光事業十年の回顧』鉄道省国際観光局 1940。新井克爾は鉄道省運輸局の国際課長から初代国際観光局長に就任した官僚であり、国際観光局は、第二次世界大戦の開戦にともない1942年に廃局した。なお、1920年から1943年まで続いた鉄道省は、1943年11月、戦時体制にともなう官庁統廃合の一環として通信省と合併、運輸通信省に改組された。
- 8) 1931年から1945年まで、湊東区は行政区として存在、現中央区の一部をなす。1945年以降、神戸区と合併して生田区となる。なお生田区は1980年に葺合区と統合され中央区となった。
- 9) 安治博道, 福原潜次郎『神戸附近名勝案内 神戸を中心として：前編』赤西萬有堂 1930
- 10) 神戸市観光課『こうべ (4万分の1程度観光地図)』神戸市観光課 1959
- 11) 神戸市経済局観光課『神戸史跡案内』神戸市経済局観光課 1954
- 12) 神戸市都市計画局『生まれかわる湊川公園』神戸市都市計画局 1970：22-28
- 13) 神戸市役所商工課『神戸市商工名鑑』神戸市商工課 1930
- 14) 石田修二編『観艦式記念海港博覧会誌』神戸博覧会協会 1931
- 15) 注9に同じ
- 16) 川辺賢武「神戸水族館のうつりかわり」『歴史と神戸』14号 1964.4。なお、神戸における水族館の歴史は古く、1895年には第4回国内勧業博覧会(京都)の付属施設として、和田岬の遊園地である和楽園に和田岬水族放養場が置かれ、1897年の第2回大日本水産博覧会(神戸)では、和田岬水族館が日本最初的水族館として開設された。この水族館は、1902年に湊川神社の境内に移され、「楠公さんの水族館」として約8年間続いたという。
- 17) 神戸市『神戸市史第三集社会・文化編』神戸市 1968：308-309
- 18) 鉄道省：1920-1943年、1947年11月には戦時体制に伴う官庁統廃合の一環として通信省と合併、運輸通信省に改組された。
- 19) 神戸市観光課『楠公精神発祥の地 神戸』1940：広告
- 20) 1945年9月17日付『神戸新聞』以下、紙名のない発行日表記はすべて神戸新聞。
- 21) 1945年11月3日付、1946年12月29日付『新岩手日報』
- 22) 1945年12月27日付
- 23) 神戸市史編集委員会『神戸市史第三集 社会文化編』神戸市 1965：130-135
- 24) 1946年5月26日付
- 25) 1946年6月8日付、6月11日付
- 26) 神戸市建設局計画部『神戸戦災復興誌』神戸市建設局計画部 1961(同書は、建設省計画局整理課監修『戦災復興誌』五大市編の神戸市分の製本による。)
- 27) 1945年10月17日付
- 28) 1945年8月23日付
- 29) 1945年10月23日付
- 30) 同前。12間=約21.8m、30間=約54.5m
- 31) 1945年9月20日。特別都市計画法案、特別都市計画法ニ基ク土地画整理ニ伴フ清算金及保障金ニ関スル件法律案、1945年9月24日発第222号 戦災都市ニ於ケル建物復興ノ応急指導方針ニ関スル件(内務省国土局長)、1945年10月8日 戦災地都市計画基本方針、街路計画標準
- 32) 注26に同じ
- 33) 注29に同じ
- 34) 1946年4月21日付
- 35) 1946年6月23日付
- 36) 同前
- 37) 兵庫県観光委員会『兵庫県観光委員会報告書』1953。1950年の神戸博を契機として、神戸観光協会は神戸国際観光協会に、国土緑地協会は兵庫県観光連盟へと発展解消される。
- 38) 神戸市観光課『観光の神戸 史蹟と名勝を中心とした』1947：附録
- 39) 工藤泰子「占領下京都における国際観光振興について」『日本観光研究学会第22回全国大会論文集』2007.12：93-96
- 40) 兵庫県観光協会『月刊観光の神戸』第23号 兵庫県観光協会 1940.10
- 41) 日本貿易産業博覧会事務局編『日本貿易産業博覧会“神戸博”會誌—1950年』日本貿易産業博覧会事務局 1957
- 42) 注12に同じ